

2023年2月19日 礼拝説教要旨

詩編講解説教138「神のまなざし」

詩編138：1～8、マタイ9：35～38

冒頭「わたしは心を尽くして感謝し、神の御前でほめ歌をうたいます」（1節）ここに「神の御前で」とありますが、「神」と訳している部分には「神々」と訳す言葉（エロヒーム）が使われています。ただ「神々」としますと多神教になってしまう、そういう誤解を与えますから、それを警戒して、新共同訳聖書のように「神」と単数形にしたり、また七十人訳聖書では「天使たち」と訳しています。しかしこれは「神々」でよいと思います。イスラエルは捕囚時代そういう異教の神々の中に捕らわれていました。神さまはそこからイスラエルを解放されました。ですからこの詩編には何より異教の神々から解放された喜びがあります。詩人は異教の「神々」にまさって、その神々の前で、唯一まことの神さまをほめ讃える喜びを歌います。

2節にも「その御名のすべてにまさって」とありますが、これもあらゆる神々の名にまさってという意味です。まことの神さまの優位性、イスラエルの神さまが王の王、主の主であることを宣言しています。それは4～5節にも続きます。「地上の王は皆、あなたに感謝をささげます。あなたの口から出る仰せを彼らは聞きました。主の道について彼らは歌うでしょう、主の大なる栄光を」（4～5節）ここには地上の王たちの存在が記されています。これはイスラエルを支配していたアッシリアやバビロニアの王たちを指しています。彼らもまた神さまの言葉を聞き、神さまに感謝をささげると言います。これはすべての支配、権威の上に立つ神さまの存在、その栄光が強調されていると考えられます。このように前半では神さまをまず高い位置に置きますが、これはこの後の展開の伏線になっています。

続いて後半部分に注目しましょう。「主は高くいましても、低くされている者を見ておられます。遠くにいましても、傲慢な者を知っておられます」（6節）本来高くいますお方が低いところにも関心を寄せてくださる。そういう驚くべき神さまの特質がここに読み取れます。この「見ておられる」という言葉は、口語訳聖書では「かえりみられる」と訳します。ただ見る、眺めているのではない。英語の聖書では see や watch ではなく regard という言葉が使われています。regard は親しみや思いやり、関心を寄せて見る、そういうまなざしのことです。ですから日本語では「顧みる」ということなのでしょう。神さまはそういう優しいまなざしで低くされている者をご覧になられているのです。

「低くされている者」とは、この文脈では捕囚民であるイスラエルを指していると考えられます。確かにイスラエルはアッシリア、バビロニアという大国に絶えず翻弄される弱小の民でありました。けれどもアッシリアもバビロニアも滅亡し、その後のペルシャの繁栄も200年ほどで衰退していきました。しかし不思議なことにこの弱小の民は存続するのです。イスラエルの信仰者たちはそういう歴史の背後に、「低くされている者」を顧みられる神さまのまなざしを感じ取ったのでしょうか。今日で言えば、「低くされている者」は罪に捕らわれているわたしたちすべての人間を指していると理解することができます。本来ならば、神さまに背いて、神さまを悲しませている罪深いわたしたちですから、神さまのわたしたちを見るまなざしは厳しく険しいはずですが、けれども今日の御言葉に従えば神さまはわたしたちを思いやりを持って見てくださる。顧みてくださる。それだけでもわたしたちは安心するのではないのでしょうか。

「目は口ほどに物を言う」と言いますが、視線というのは、時に人を軽蔑したような、冷たいものになることがあります。意外と人は敏感にそれを感じ取るものです。けれども神さまのまなざしは違います。こどもさんびかに「やさしいめが」という賛美歌があります。「やさしいめが、清らかなめが、今日もわたしを見ていてくださる。まっすぐに歩きなさいと見ていてくださる」神さまのまなざしはそういうものです。子どもを愛おしいと見て見るように、神さまはわたしたちを優しく見ておられる。これは決してヒューマニズムではなく、他でもない主イエスのまなざしがそうなのです。福音書に「群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」（マタイ9：36）とあります。憐れむというのは、深い同情を持って、自分自身が痛むような思いです。本来高くいますお方はそういう同情はないと思われるかもしれませんが、しかし神さまはこの隔たりを超えてわたしたちに寄り添い、深い同情を持って見ておられるのです。そしてそのまなざしがやがて思いを突き抜け、具体的な御業となって現れた。それがイエス・キリストに他なりません。

「わたしが苦難の中を歩いているときにも、敵の怒りに遭っているときにも、わたしに命を得させてください。御手を遣わし、右の御手でお救いください」（7節）「御手を遣わし、右の御手でお救いください」この言葉はキリストによって成就しました。低くされた者のためにご自身を低くされてこの世に来られ、そして最後は十字架で死なれました。フィリピ書の御言葉「へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」（2：8）を思い起こします。今週から受難節が始まりますが、何よりも「低くされている者」を顧みてくださるために、ご自身が低きに降られた、この神さまのへりくだりを覚え、感謝してこの時期を過ごしたいと思います。

しかし、どうして神さまはそこまでなさるのでしょう。その答えもまた今日の御言葉の中にあります。「主はわたしのためにすべてを成し遂げてくださいます。主よ、あなたの慈しみがとこしえにありますように。御手の業をどうか放さないでください」（8節）ここに「慈しみ」（ヘセド）がありますが、この138編も神さまの「慈しみ」（ヘセド）が貫かれています。この慈しみゆえに、神さまはすべてを成し遂げてくださる。神さまがお造りになられた人間に対して、結ばれた契約に対して、神さまはどこまでも誠実に、始められたことを最後まで成し遂げられるのです。これもフィリピ書ですが、「あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、わたしたちは確信しています」（1：6）この神さまの慈しみこそ、最後の完成を望み見る、わたしたちの希望になっています。

そして、このような神さまのまなざしの中で救われた者は、自らもまたそのようなまなざしを持って生きる者と変えられていくでしょう。殺伐とした現代社会、世の中の厳しい視線に晒されて、人は絶えず緊張や不安の中にあります。でもわたしたちはそのような中でも、お互いを思いやり、親切な心、優しいまなざしを他者に向けることができる。そのような新しい命がわたしたちには与えられています。